

新刊紹介

K. Takahata(ed.):

Ratnamālāvadāna, A Garland of Precious Gems. I

(梵文大乘寶鬘譬喻經 (一))

高 畠 寛 我著

高畠寛氏は長年にわたる研究の成果の一部として、最近に「梵文大乘寶鬘譬喻經」の校訂本の第一分冊を公刊せられた。戦時下の我國に於いて、かゝる眞摯なる研究成果が發表されたことを先づ慶びたいと思ふ。

同書は第一分冊のみであり、又本經の内容に關するプレフェースもまだ添えられてゐないから詳しいことは判然しがたい。たゞし同種の經典の“Ratnavadānamālā”(寶鬘譬經)についての研究は「日本佛教協會年報」第五年(昭和七年度)に掲載されてゐる。恐らく本經も大體同種の譬喻經典であらう。そして第一分冊には十三個のアヅダーナを含むが、その後になほどれだけのアヅダーナが存するかはわからない。釋尊以外の出家在家

の弟子達の前生物語であつて、あたかも釋尊に於けるジャータカに比せらるべき種類の經典である。即ち彼等の過去世の善惡業がいかなるものであつたか、そして夫れが現在世に如何にはたらきかけたかを説くところの「業物語」である。そしてそれらは多く大小乗の過渡期の製作であつて現存する主なる譬喻經典としては Avadānaśataka (百喻經、漢譯撰集百緣經十卷)、Bharṇasataka (百業)、Kāpāṇaṇḍikā (施設莊嚴、大莊嚴論經(十五卷)、雜寶藏經(一〇卷)、Aśokāvadāna (阿育王譬喻)等數けられる。今爰に新たに梵文所傳の一經を加へたことは、斯學の研究上大いに裨益するところといはざるを得ない。

ところで高畠氏は“Ratnamālāvadāna”なる本經名の譯名として「大乘寶鬘譬喻經」となしてゐられる。こゝに特に「大乘」なる語を添加されたのは勿論充分なる論據に立つてのことであらうか、實は紹介者はこの點に最も興味をいだかしめられるのである。勿論譬喻經典の一群が大小乗の過渡期の製作にかゝり有部傳といはれる「天譬喻」などにも「大乘」なる用語が屢々見られるのであるが、いまだ大乘經典の部類には攝められぬものと一般に認められてきた。それ故にこゝに、特に「大乘」なる語を添加せられた論據を教示されたく、紹介者は切に希望する次第である。

さて、この校訂本のもつくマヌクリプトは、京都帝國大學所藏の二本と柳博士所藏の一本と、巴里の國民圖書館所藏の寫本の複製との計四本である。これらの相違點は脚註に詳しく出されてゐる。この他第一アヅダーナのみについては他の二本

が参照されてゐる。巻頭にはこれらのマヌスクリプトの或る紙葉の寫眞が出されてゐる。

以上まことに簡單であるがこの書の美はしい印刷（ローマナイズされたもの）と立派な用紙とを現在における一つの奇蹟と考へながらひろくこゝに紹介する次第である。

（昭和十三年十二月 東京金尾文淵堂發行 頒布實費金參圓五拾錢）（龍山）

聖德太子 日本上代文化の研究 奉讃論文集

法相宗勸學院同窓會編

本年は聖德太子登遐し給ひてより、正しく一千三百二十年の御聖忌に當る。去る四月法隆寺に於て、太子奉讃法要が盛大に嚴修されたことは、今尙我等の記憶に新しいことである。その際、太子の御寶前に供へ、以て鴻恩の萬分の一に報ひ奉ると共に、廣く世にその御聖德、御聖意を顯揚せんとの意圖の下に、「性相」第十號特輯號として編纂刊行されたのが此の論文集である。

收むるところは、現今我國佛敎學界著名の學匠二十四氏の力篇にして、太子の御聖德を偲びつゝ、御精神、御事蹟等を各々専門の見地より探究され、太子によつて明示された皇國臣民の歸趣すべき處を、一層闡明せんと努力されたものである。今や世界的動亂の此の非常時局下に、此等學匠の研究の結晶を味讀

新刊紹介

し、思ひを潜めて太子の眞精神を領受し、そこに自己の道を發見すべきである。（洋裝背金文字、菊版四八三頁、題字實主佐伯定胤師、口繪聖皇曼荼羅、定價金四圓八拾錢、法相宗勸學院同窓會發行）（Y）

宗教の眞理

片山 正直著

今秋上梓された宗教哲學方面の新著、一讀して眞摯な力のもつた勞作であることが肯かれる。宗教に學的關心を有する者の見のがし難い好著であらう。以下簡單に紹介の筆をとることとする。

*

宗教を單に客觀的現象として見ず、主體的に最もすぐれた價値的事實であるとし、その眞理性を深く基礎づけようとするのが、斯の著を一貫する基底的意圖である。

先づ著者は宗教固有の立場を闡明することを最初の課題とする。我々はこゝでシユライエルマツヘルに歸らねばならぬ。その『高次の實在主義』を正しく理解し、更にその基礎づけを深くすることによつて、この課題を確實に解決しなければならぬ。思ふに宗教をして宗教たらしむるものはその超越性である、宗教を究竟して我の深き生命自覺に性格づけ、或は一定の社會理念に解消せんとする如き、その有する意義如何に拘らず宗教

の超越性を奪ひその眞實義を昏くするものである。

宗教的生の實際はかゝる見解を峻拒する。救は決して直接無媒介に與へられるものではない。自覺的・表現的生が否定され超越され盡して無となりをはるとき、彼岸の超越的深みは初めて開かれるのである。宗教的行爲或は表現は、その性格に於て最早表現ではあり得ず、彼岸よりの光に望なるものゝ深みを仄かにあらはす象徴と名づけられるべきであらう。象徴はその種々相をとほして主體的には現存在の限界體驗・客體的には聖なるものとの邂逅の意味を負ふものである。象徴こそ高次の實在がみづからを顯はす仕方である。

表現——自覺——超越と螺旋的に還歸即發展する人間的生の構造に對し、宗教的生は象徴——信仰——救済の構造をもつといはれやう。高次の實在主義は高次の象徴によつて導かれるのである。

次いで著者は宗教的生の主體的側面に立入つて信仰の論理の究明を試みてゐるが、紙面の都合上こゝでは省略することにする。

最後に取扱はれてゐるのは根本惡の問題である。

宗教的體驗はそのまゝ救済の體驗である。かゝる體驗は人間存在が根柢より否定される所に初めて成立するといふことは、正しく人間そのものが根源的に惡の存在であることに他ならぬ。根本惡はまさしく宗教的體驗の事實である。併しこの事實は果して人間存在の全體に通ずる普通の眞實であらうか。

思ふに表現形成的行爲は超越せらるべき世界の無底の深さを示す。表現的行爲の依據する根柢には遂に自覺の光の届かない

闇がある。自覺が深まれば深まる程、自覺的存在の有限性は動かし難いものとなり、みづからを不安の中に意識するに到る。人間の立場に依據する文化主義・理想主義は純粹眞摯であればある程、それ自身有限性を自覺し無底の不安に直面せざるを得ないのである。

のみならず染汚の因は、深く表現的行爲的自己そのものに運命的に纏綿してゐるのである。根本惡の祕義は創造の原理である自由意志そのものに内在する。それは我執となつてあくまで他者を否定し、有執となつて所造に執着する性格をもつ。自覺の届かぬ自我の闇所に於て己を主張し神を否定しつゝあるのである。かゝる有所得の見は抵抗なきところ傲慢に増上し、抵抗に遭へば怒りと化し、否定せられては絶望に陥る。窮極するところ正しく死の原理となるより他はないのである。『深い罪の意識こそ最も深く自己自身を見るものゝ意識である。』自性の底深く凝視するとき、切實な救済の求めが口を衝いて出るのは餘りにも明白である。

自覺面そのものが摧破されて絶対無となると、神的世界は忽然として彼岸より開ける。自我の存在が根柢的に破壊されたといふことと自體に神の手が見られるのである。かくして我々はこのこされるのは唯決斷のみである。信仰の世界はその足下から開ける。人間として滅び去つた我は、アガベの大悲の中に再蘇せしめられ、還相廻向的に働き出でしめられるのである。

*

述べ來つたところは極めて大づかみな拙い素描ではあるが、

斯の著の豊かな内容の何程かを傳へ得れば幸である。

この外、シュライエルマツヘルの『無限者の感情』をその信仰論との照應によつて明確に解釋してゐるのも一つの忘れ難い貢獻である。オットーのヌミノーゼに關する批評も肯綮にあたつてゐるといふことができる。又宗教の立場を象徵論によつて解いたことも極めて適切であると思ふ。

根本惡に關する章は、特にその周到な立論と相俟つて力が脈動し、よくこの困難な問題の基礎づけを果してゐる。序文にもしるされてゐるやうに、斯業結實の背後には波多野博士を始め西田博士、田邊博士の深い影響が窺はれる。しかも著者多年鏝骨の苦心は、それらの影響を渾然として自らに溶融し、一個匂高い新果をなしてゐるのである。

*

斯の著に於て見られるやうな批判的立場が宗教哲學として優れた意味をもつことは最早贅言を要しないであらう。唯、問題にかゝる立場が果して宗教的生の構造を、あらゆる場合をつくして餘蘊なく解明し得るかどうかである。この問題はまだ／＼深い問題であると思ふ。斯の著はいろ／＼な意味で我々を裨益するのみならず強く刺激してくれる勞作である。

(定價貳圓五拾錢 岩波書店) (S)

眞宗教學之研究

住田 智 見著

住田講師の遺稿集の第二巻で、これが第一回の配本として刊行を見たのである。本書はその内容を四編にわかし、第一編「眞宗教學の研究」では「三經之交際」「七祖之系統」「相承要義」てふ主要なる研究論文を集め、こゝに三經・七祖の傳統より、更には宗祖から運師までに至る宗義相承の經緯までを纏めてある。第二編「尊號眞像銘文講讃」は、昭和六年安居本講の折の録で、餘り世に流布してゐないところから、これを本書に收めたものである。第三編の「論文」では、『無盡燈』を始め諸種の雜誌に掲載せられた代表的勞作十八篇を蒐め、又第四編の「講案」は教授の手控へとしてのノートを特に整理して發表されたものである。而してそれは、『論註』『四帖疏』『具疏』『要集』『選擇集』『御文』等の私纂を内容とする。一部全編すべて簡潔な説明をもつて貰かれてゐる所に先生獨自の風格がなつかしく偲ばれ、又隨處にみらるゝゆきとゞいた考證は先生の慈眼に接するの思ひあらしむるのである。好學の士の一讀をこゝからおすすめする。(菊判本文六四一頁、寫眞二葉、序文二頁、凡例二頁、目次二十頁、價五圓、東京市本郷區駒込動坂町三六〇、住田先生遺稿刊行會發行)

— K —

散善義述義

大須賀秀道著

本年度夏安居本講の録として、師が多年の蘊蓄を傾けてものせられたものが本書である。著者は、『觀經』のもつ特種な性格と、これに對する善導大師の領解に細心なる検討を加へ、これを「文前懸談」として、透徹せる論理のもとにその麗筆を運んでゐられる。内容に入つては、「散善三福」、「廣釋九品」、「得益流通」の章を設け、各章下においては更に詳密なる項目を立てゝ、隨文差釋風に述べられてゐる。全體にあふるゝ含蓄の豊かさ、その親切なる解説は學徒の好伴侶たるを失はぬものである。(菊版、二六九頁、非賣品、大谷大學内安居事務所發行)

K —

隆寛律師の淨土教附遺文集

平井 正 戒著

本書は佛教專門學校の金澤文庫淨土宗典研究會の研究報告第四輯として上梓をみたものである。前半の論文は著者が多年隆寛の遺文について研鑽せられたる貴重な勞作で、先づ隆寛の傳を究め、次に律師の著書に解説を試みて之を序論となし、本論では隆寛の觀經觀・本願論・安心論(三心觀)・起行論(定善、

散善、正雜・助正、念佛)・一念多念論・國土論・等詳細に項目をわかつて、從來とかく明瞭をかつてゐた隆寛の淨土教を明らかにしてゐる。

次に、附録として『具三心義』『極樂淨土宗義』『散善問答』『彌陀本願義』『定善義問答私見問』『滅罪劫數義』『善徳和尚十德鈔』等の遺文を集めてゐるのは斯學研究者への一大福音であり、更に遺文集の索引をも添えられたところに著者のゆきといいた親切がみられてうれしい。

(菊版、本文二七〇頁、附録遺文集一六九頁、圖版七葉、索引三四頁、定價五圓、佛教專門學校内、金澤文庫淨土宗典研究會發行) K —

日本文化論考

西村 眞 次著

著者が多くの機會に發表された古代研究の業績を一卷とされたものである。此の土俗社會工藝言語考古等諸學の文化人類學面からの綜合としての文化史的考察が我國古代研究に重要な多くの開拓を齎されつゝある事は衆知の通りであるが、本書に於ても例へば「日本文化の源泉」古代日本文化と海の交通線「船舶と日本」「文化史より觀たる萬葉集」等にはこの研究態度の清新さに深く傾倒せられるものがある。と同時に他の諸篇「日本民族の體質文化及優秀性」「大和民族の文化と傳統」「聖國の

大精神」等に於ては、著者がその學問的な科學性から割出されるヤマトスベリオリテーなる概念の中に、我々は日本民族、國家の特異性を見出すのであつて、此の意味で本書は又ブラグマテシユなものでもあらう。

(昭十六、五、厚生閣、貳圓五拾錢) (K)

歴史の理論

樺 俊 雄 著

歴史叙述が單なる過去の文獻的實證主義からでもなく、又超越的理論の價值主義から成されるものでもなく、現在の立場に立たねばならないといふ提唱は現今に於ける歴史學の大前提となつてゐる。こゝから出發して最も大きな暗示を與へる人々に歴史主義的歴史の立場に立つクロオチエがあり、文獻的價值的なるものゝ現代的綜合の立場に立つトレルチがある。然し所謂歴史の危期なる叫びは此等の人々によつて如何に克服され解決されたであらうか。未だこゝには多くの問題が残されてゐる如くである。

本書は過去十年餘に發表された著者の諸篇(現代歴史哲學の展望、歴史と世代、歴史家、解釋學、ドロイゼンの歴史觀、フイヒテの歴史哲學、ランケの理念論、全體主義的歴史觀、文化社會學と歴史性、人間學と歴史學、歴史叙述の歴史)を收め上梓されたものであるがそれを一貫する立場は新しい歴史學の建

設、未來の建設に意義を持つ歴史といふことである。管見すれば、歴史的個性的實證的なものと普遍妥當的合理的なものと統一としての現在の綜合としてのトレルチの立場に立ちつゝ、更にそれを辨證法的止揚によつて實踐的行動、廣義の物質生産行為に迄高められんとされる所に著者の立場がある如くである。此等多くの諸篇は歴史叙述の歴史たると共に歴史叙述の理論であつて、こゝに我々は史學史の先端に立ちつゝその建設的立場によつて一步それを踏越へせしめられる強さがあるであらう。(昭十六、五、刀江書店、貳圓五拾錢) (K)

切支丹傳承

三 田 元 鐘 著

寛永禁厭以來全く潜伏的陰宗として深く郷土民衆文化の中に潜在してしまつた切支丹を研究することは種々多くの困難を伴ふものであるが、本書は著者が其等郷土化した數多くの傳承文化の說話史實傳説等の長年の豊富な蒐集を綜合、思想信仰傳承の三編に分ち二十數葉の寫眞を添へ興味ある報告とされたものである。これ等の傳承研究が切支丹研究にとつて誠に大きな業績である事は云ふ迄もないが、更に氏の麗妙な文學的叙述は、かつての生々しい信徒達の姿を現前せしめられる觀深く、歴史文學としての興味をさへ持つことが出来るのである。

(昭和十六、八、厚生閣、貳圓八拾錢) (K)

釋尊 (知識講座 第一回)

舟橋 一哉著

眞宗聖典の話

(佛教知識講座 第十一輯)

桑谷 觀宇著

本書は釋尊を一般大衆にまで手渡さんとする意圖の下に専門的難かしさを避けて極めて平易に書かれたものである。内容は傳記と教説との前後二編に分れる。前編は傳記ではあるが、普通の傳記の様に單なる客觀的描寫のみに止らず主觀的印象感情等の加へられたものであつて、爲に様々の傳説が非常に潤ひのある姿に取り上げられ、巧みな筆致に依つて釋尊の偉大な人格が目のあたり髪端と浮び上つてゐる。後編の教説に於ては、緣起無常の教説を「もちつもたれつ」なる言葉で表現し、唯心の教説を「ものは思ひよう」なる言葉で表現し、終りにその教説を親覺聖人の自然法爾にまで結びつけ、種々示唆に富んだ例話を以て難解な教説を人生々活の上に判り易さの裡に體得せしめんと努力されてゐる。特に後編は「私の研究の結果を小さく纏めてみたもの」と言はれてゐるから、専門家の學的業績の結晶として價值あるものであり、深く味讀すべき所であらう。一般に大衆讀物たるを標榜すると啻に底俗になりがちであるが、氣鋭の學者の書かれただけに品位を失する事なく、小冊子ながら要領よく釋尊を傳へる良書であり、著者の勞の程が察せられる。敢て一本を江湖に薦める。

(昭和十六、八、大谷出版協會、六拾錢) (Y)

本書は著者積年の研鑽になるふかき造詣と、進る眞摯な信仰的熱情とをもつてものせられてゐる。かゝる平易な表現をもつて、淨土三部經より蓮如上人の聖典に至るまでを、よく其の要を取つて一本となし得たものは、恐らく本書を以て嚆矢とするであらう。此所ではすべての聖典が全體的に統一ある主張をなしてゐると同時に、各々の聖典のもつ其の特殊な性格をも遺憾なく浮びあがらせてゐる。繙く者は誰しも法悅的な沈思の淵にふかぶりゆき乍ら、自づと各聖典の骨子を窺ひ得て、知らず著者の豊富な體驗の舒述にみはらしめられるであらう。眞宗聖典の溢れる宗教的精神と、教義の大概とを獲んとするものは勿論新しき試みの完成を渴望して居たものは此の著によつて必ず積陰を掃するの懷ひに到るであらう。

(A 6判、一八〇頁、定價六拾錢、大谷出版協會發行)

— 雨 森 —